

研究報告書

2017 年度 学術交流支援資金 電子教材作成支援

科目名：フランス語インテンシブ、フランス語ベーシック

研究代表者氏名：西川 葉澄

所属：総合政策学部

教材の概要：

協働学習および異文化間教育を活性化するための動画スキット教材を作成した。SFC のフランス語セクションでは教科書に依拠しない外国語学習を目指しており、授業の素材となるスキット＝言語学習＋背景＝文化状況を組み合わせた補助動画が必要となる。前年度より、その一部がすでに作成され、フランスの日常生活における様々な場面を舞台に、文化的要素を含んだスケッチが完成しているが、今年度も同一のコンセプトでコンテンツの拡充を目指した。

時代の潮流の早さに合わせて刻々と変わる言語と文化、現代社会に合わせ、コンテンツを現在のフランスのみならずフランス語圏の国の日常に沿った内容に更新するとともに、シナリオに使用する表現等も時代に合わせた若返りを図った。また、内容にもより一層の多様性を持たせたものとなった。演者に学生と同年代である日仏バイリンガルの若者を起用することで、学習者のモチベーション向上およびロールモデルの提示も狙った。

研究組織：

西川葉澄(総合政策学部・専任講師)

パトリス・ルロワ(総合政策学部・訪問講師)

國枝孝弘(総合政策学部・教授)

塩田明子(SFC 非常勤講師)

ジョルジュ・ヴェスィエール＝佐藤(SFC 非常勤講師)

I. 研究の背景と目的

SFC フランス語セクションでは、2015 年秋学期より、français sans manuel「教科書なしでフランス語」という実験クラスを、インテンシブの枠内に設けてきた。あらかじめ文法シラバスで書かれた既製の教科書を指定して、その進度によって文法項目ありきで言語を教えるのではなく、週 2 回は、教室で学生と相談をしてその場でディスカッションをする話題を決定し、主に「文化」の観点から授業を行なうという試みである。うち 1 回は、その授業内容に基づいて、文法項目を設定し、説明をする。もう 1 回は、それらをまとめる回であり、既習事項の再活用・応用をねらいとする。この「教科書なし」クラスは、

2017 年度も継続して行われている。従来の教科書を使用するクラスとの1年後の比較においては、言語習得レベルに大差はないが、教科書なしクラスではより自発的で積極的な参加が見られるとともに、2年目も学習を継続するなどモチベーションが維持されているといったように、すでに期待される成果を上げ始めており、この試みが軌道に乗り出したといえるだろう。今後もフランス語教育界の最先端を走る授業として、この試みを継続していくものである。

教科書を使わずに授業をするとはいえ、教材は必要である。教師はディスカッションを通し学生と相談しながら、学びに必要な教材、素材を手持ちのストックの中から適宜選択するが、適当な教材がない場合は、WEB 上を検索するなどして、ふさわしい資料を学生に提示するという、オーダーメイドのような形で授業を構成する。時には資料を用意せずに、学生とのディスカッションによって授業を構成することもある。

動画教材を作る目的は、この「アドホックな状況」の中で、資料として有用な動画教材をできるだけ豊富に作成しておくことにある。オーセンティックな資料を利用せず、自作の教材が必要な理由は、学習が効果的になされるためである。教材1つにつき、1 つのテーマに絞ることで、学生が動画を見たときに、学習項目がクリアに理解されるため効果的な学習が期待される。

また、この教材作成のもう一つの理由は、たとえ教材であっても作品として観賞に耐えうるものにするためである。あたかも 1 分間の短編映画作品を見ているようなアーティスティックな側面を学習の中に加えることは、学習と情動を結びつける重要な意味を持つ。従来の語学教材としてのビデオは「教材」という固く構えた人工的な感じを与え、場合によっては学生に心理的な障壁を与えるが、あえて語学学習ビデオから典型的な教材の持つ「教育的な」スタイルを廃することで、「学ばなくては」という強迫によるプレッシャーから学生が解放され、学生がよりリラックスした状態でコンテンツに見られる表現やメッセージ、思考の余地を見出すトピックによりフォーカスでき、そこで得た学びの記憶が長続きするのではないだろうか。

上記のように、2015 年度より始まった「教科書なしでフランス語」クラスの試みは、現在も期待以上の効果を上げながら継続されている。このプログラムが活用するビデオ教材のアップデートは、実際の場面における自然なフランス語の習得の助けになるという面のみならず、学生のフランス語学習に対するモチベーションの維持および向上に欠かせない。

また 2017 年度から日本とフランスという二つの文化をただ並置して比較するのではなく、一歩踏み込んでその違いにおけるそれぞれの価値観についての考察や内省を促しうるような、異文化間教育の面をシナリオに盛り込むことを試みた。さらに、フランス語はフランス国内だけで使われている言語ではなく、フランス語圏と呼ばれる地域が世界5大陸に分散して存在している。フランス語圏の国々を無視してフランス語教育を行うことはもはや不可能である。2017年度は、フランス語圏より特にカナダのケベック州に着目して、ビデオによる効果的な紹介に着手した。以上の試みにより、フランス語を通して地球市民としてのより良き異文化理解の助けになることが目的である。

II. 研究成果

2017 年8-9月にフランス(主にパリとその近郊)においてロケ、同年 12 月末から 2018 年1月初旬にかけて、カナダのケベック州モントリオール及びケベックシティにおいてカナダロケを行った。

まず、フランスにおいてはエコロジーをテーマとして、フランスと日本におけるエコロジーへの取り組みを紹介しながら、ユーモアを交えたフランス語での会話をスキット仕立てで教材化した。取り上げるトピックは再生可能エネルギー、過剰な冷暖房、建築物に使われる断熱素材、エコロジーと美的側面の両立、エコロジーと社会など、現在フランスのみならず日本でも話題になっているトピックとし、それにあわせたダイアログを作成して、教材化した。

次に、カナダにおいては、ケベック州のモントリオール(仏語名モンレアル)およびケベックシティ(仏語名ケベック)において現地取材がなされた。モントリオール市内及び近郊地区における路上での通行人の方々に対するインタビュー及び撮影、ケベック州のクリスマス風景と関連する街頭インタビュー等が行われ、それを元に動画教材が作成された。さらにモントリオールのフランス語圏を代表する大学として知られるケベック大学モントリオール校(UQAM)、モントリオール大学の語学教育関係者たちと面談し、モントリオールやケベックをはじめとするケベック州内外におけるフランス語の状況と展望などを聞く機会を持った。言語教育の専門家たちへのインタビュー、ラジオカナダをはじめとする様々な文化施設(Juste pour rire劇場、モントリオール歴史センター等)での取材も行い、その豊かな文化面に触れることもできる合計20時間程度の映像情報を幅広く網羅した。また取材時期が年末であったため、クリスマスシーズンのモントリオールの中心街の様子、気温が氷点下20度となる北国の暮らしを紹介している。また、典型的なフランス語話者の街であるモントリオール東側の各地区をビデオの背景とすることで、文化的な感受性の向上をねらった。

前述したように、フランス語圏はフランスのみではなく五大大陸に存在するが、例えばイギリスで話される英語とアメリカで使われる英語とが語彙的にも発音的にも異なるように、フランス語圏内においても各地で話されているフランス語は同一のものではない。今年度はフランス語圏の中でも、非ヨーロッパ圏の重要なフランス語圏である北米はカナダのケベック州のフランス語にフォーカスしたが、こうしたフランス語の多様性を象徴するケベック州のフランス語は、「ケベコワ」(ケベック地方のフランス語)として独特なアクセントやリズムと発音、語彙がフランスのフランス語とは異なるためフランスからは揶揄の対象となることも多い。しかしそれは前時代的なケベックの捉え方であり、現在においては、ケベックはフランス語圏を牽引する重要な地位を占めている。

ところが、日本に在住する学生にはなかなか世界のフランス語圏について知ることが難しく、多くの誤解に満ちたステレオタイプに彩られた情報に迷わされることが多いが、こうした率直なカナダのフランス語圏紹介はそうした状態から学生の目を開く最初の一步となることだろう。

上述したように、「教科書なしでフランス語」という新しい教授法は、2016年度予算で作られた映像教材によって、すでに軌道に乗り始めている。2017年度は、2016年度予算で作られた教材を量的にも質的にもさらに補完する形で、これまで動画作品に反映されなかった異文化間教育の視点を導入し、シナリオの監修に若手の非常勤講師を起用することで、時代に合致した言語面での若返りも図り、さらに全てのスキットを貫く全体テーマとして新たに提示するエコロジーと多様性というテーマにより、学生の地球市民としての意識を養成するという面も持つ。自律的な学習のため、学生たちはみずからの興味とクラスでのディスカッションによって、自ら学びたい内容を決定する。教材はあくまで、その学びのサポートのためにあるものであり、動画補助教材は、学びの下支えとして機能するであろう。そのためにも動画教材を豊富に準備することが必要となる。

また、この新しい教授法によるもう一つのメリットは、教員が「決められた教科書を使い、その通りに展開しなくてはならない」という「教科書の呪縛」から解放されることによって、教員も自らの教え方に反省を迫られることにある。この素材を使って、言語と文化について何をどういう順序で学生に与えていくか、またそこからディスカッションの萌芽となるような「ひっかかり」を探してこられるかは、各教員の力量にかかっているといえる。すなわち、この動画教材はあくまでも「素材」であり、それを用いて、学生と一緒に授業を構築していくのは、教員の創意工夫に依るという、教授法そのものの更新をも目指すものである。この教育哲学が SFC のフランス語教員の間で共有され、その価値および教育効果が確認されつつある。今後、こうした教え方、考え方は SFC を発祥として全国のフランス語教員の目指すところとなるはずである。これはまた、語学教育のみならず異文化間理解とエコロジーや多様性に関する問題への意識化を促すなど地球市民としての教育も同時に目指すものである。

III. 今後の課題

本研究は SFC フランス語インテンシブ、ベーシックのクラスにおいて使用可能な、協働学習および異文化間教育を活性化するための動画スキット教材の作成とコンテンツの拡充を目指した。

映像制作のプロフェッショナルとして訓練を受けた講師が実際の映像制作を一手に引き受けているため、撮影後の編集等も含め一貫した動画作品の質の高さと同一の視点や美学を貫けるという利点がある一方で、今後の課題としてはあえてカメラに複数の視点を導入したり、動画制作を分業化するなど、あらゆる人間が YouTube やInstagramで発信者である時代に合致するような新鮮な映像作りの可能性も模索していきたい。

また、今回注目したフランス語圏の多様性についてであるが、今後はアフリカ大陸や南北アメリカ大陸に残るフランス語圏（アメリカのルイジアナ州、南米のグイヤーヌやカリブ海のマルチニックなど）を始めその他のフランス語圏、またいわゆるフランス語圏ではないがフランス語を学習する人々のコミュニティなどにも引き続き注目し、学生の心に残るようなコンテンツ作りを継続していきたいと考えている。

(文責:総合政策学部 専任講師 西川葉澄)